

学部学科・大学院創設の理想と現実の狭間で

加藤 孝 義（大学院初代心理学専攻主任）

2000年3月東北大学を定年になった時点で、更なる教員生活はしないと決めていたので、研究論文資料等は他の研究者に引き取って戴いたり、処分したりして整理し、著作に専念することにしていた。そのような折、元本学学長の渡部治雄先生の説得に負けて、2003年の学部創設から尚絅学院大学に全くの新任者として在籍することになった。

最初に個人的に一番困ったことは、研究環境を整理したために、自分の専門分野の研究資料がなくて、大学人に戻ることに物理的精神的に大変な労力を要したことで、継続を断ってしまった事の重大さを認識しました。「継続は力なり」の意義を心底から痛感した。

尚絅は短大の長い伝統が確立していたのに、それが4年制大学（通称四大）に再編創設されたから、この伝統と新体制との間に大きな未経験のギャップが生まれ、そのギャップに四大の体験のない先生方と学生たちの適応が課題だったと感じました。それともう一つは、4大創設による学部としての個々の専門科目の専門性の深化を図る必要があると同時に、学科編成は複合的科目制をとっているために、「深化と総合化」の相反する関係の調和を図る難しさに直面したわけです。この問題が端的に浮き彫りになったのは、卒業論文に対する認識です。これはいわゆる「論文」なのですが、この論文の理解は短大時代の先例に学生は習おうとしましたので、「先輩は、3日で書き上げたから、何とかかなと思います」と言って、平然としているくらいです。論文とは言えないものも作成されそうな気配なので、卒業「研究」と呼んで、この概念の緩和を図ったりした先生もいたり、その扱いと理解はまちまちなところが出てきました。最初の4大卒業生が誕生するあたりの大学の現実、このようなところから始まったと感じます。

学部創設の多忙な職務が続く時期に、学年進行とともにすぐに大学院創設の課題が持ち上がった。特に学生に人気のある心理学に対しては、臨床心理士の資格を求める声があって、学卒後大学院に進学する希望者がいたら、これに応える体制が必要との学内外の背景が進行していた。人間心理学科内では、短大から四大になって負担増がある上に、これに大学院を上乘せすることには、負担過重、時期尚早などかなりの反対意見があった。しかし当時、改組で四大になった大学では、大学院があることが大学の格として社会的評価を受けていたこともあり、大抵の大学では大学院をも創設するのが一般的であった。渡部元学長は是非尚絅にも大学院を創設すべきとして、陣頭指揮をとられた。

私は四大で任期は終了する身分なので、当初大学院創設には関与していなかった。しかし臨床心理学専攻には、臨床心理士の有資格者が3名必要なこと、しかも大学院担当教授2名が必要との設置審の審査情報を得て設置準備をしていたが、当時、尚絅は大学改革後発組みに入っていて、有力な有資格者は現職を離れてまでも大学院の申請に力を貸す教員の獲得は難しく、臨床心理学専攻の創設は困難であることが判明した。

しかも大学院創設には、指導教員有資格者教授2名、科目担当者が3名合計5名の専任教員が必要であり、この教授2名のうちに私が該当することもあり、このあたりから私も大学院の創設に間接的に関わることになった。もう1名の教授探しも難航していたが、偶然の機会に社

会心理学専門の菊池章夫先生が可能との情報があり、有力者の説得を通して同意を得て、大学院申請時の年齢制限にからくもパスする幸運に恵まれた。

この頃の私は、学部の充実も問題なので、短大から大学院までの駆け足では、大学院の創設まで進展するのは課題が多過ぎるとは認識していたが、またこの機会を逃せば、恐らく永久に設置できないであろうことも、大学改革に立ち会った過去の何度かの経験から予想でき、また他学科の大学院創設に協調しなければならない事情もあり、何とか創設の方向に協力しなければならぬ状況になっていた。

現在の大学院の心理学専攻の名称は、創設を申請する際、専門分野の科目名に審査上の制約が比較的少ない利点を考慮して決めたが、設置審の審査も無事パスし、心理学専攻名で認可されたわけである。心理学専攻の関連科目の設置も、多くの現実的制約のなかで考えざるを得なかったもので、他大学と比べると最小の規模になっているけれども、何とか一応の体裁は整えられた。これは小規模大学では止むを得ない現実的な事情であった。

大学院についての所感は、『尚綱心理学論集／1』（2009）に載せた「創刊号に寄せて」が適切と思えるので、それに委ねることにします。

創刊号によせて

尚綱学院大学に総合人間科学研究科心理学専攻の大学院修士課程が新設されてから2年経過し、この3月初めての修了生が誕生することになりました。

振り返ってみますと、本学は短期大学の改組による4年制の学部創設、そしてその学年進行にともない修士課程の大学院創設とかなり足早に改組続きの年月を経過してきました。改組による学部学科や大学院創設は、理想的なカリキュラムを編成して出発できる新設の場合と異なり、スクラップ・アンド・ビルドの足場から始めるためにどうしても不備な点が残るのは避けられません。

このような背景があっても、将来のためには出発が大変大事になると考え、最初から大学院生のための最終報告の場として、院生のためのジャーナルを創刊することを専攻会議で決定しました。これを発刊することで、心理学専攻の中にひとつの伝統を作り出す手がかりにしようという発想です。このような航跡を残し続けることにより次第に伝統が形成されていくことになるでしょう。一つのシステムが、それなりの姿・形を生み出すには時間がかかります。まさに「継続は力なり」です。地味なそして向上心をとまなう努力を続けながら、よりよい心理学専攻として期待され、評価される時を迎えられるように祈念し、また先例のない環境の中で努力された大学院生の皆様に敬意を表して、更には心理学専攻の教員・関係者の方々のご努力に感謝して創刊の辞と致します。

春まだ浅き大学キャンパスに臨みて

加藤孝義（心理学専攻主任）

創刊号の内容はいろいろ問題点があっても、多忙な中、期限内に発行できたことでよし、としなければという心境でした。改善すべき点はアドバイスしておきましたが、その後送られてきた号をみますと、ジャーナル論文としての体裁・内容は合格点を超えています。普段の努力によって、伝統的な知的財産としての十分な役割を果たすと期待されます。